打 敷 ―東本願寺の荘厳―

准教授　平　野　寿　則
（日本近世史・仏教史）

浄土真宗では、様々な仏具によって堂内を荘厳します。それは他力の信心がなす阿弥陀仏の浄土の具現化にほかなりません。そのなかでも仏前や尊前の荘厳具には、上卓や前卓、その上に配置される香炉や香盒、香盤、華瓶、花瓶、鶴亀（燭台）、それに供する花や蝋燭、打敷などがあります。

打敷は、こうした堂内荘厳具の一つであり、仏前・尊前の卓上を飾るために錦繍などを用いて敷き掛ける布帛のことです。また、卓の胴を囲い覆う布帛を卓囲（水引）といい、その上から打敷を掛けることもあります。形状には方形や長方形、三角形のものがありますが、浄土真宗では、主として三角仕立の打敷や、方形のものを一つの頂角が真んなかに逆三角形をなすようにして敷き掛けて用いるものがあります。文様については、八藤紋や抱牡丹紋をはじめ、阿弥陀仏や浄土の世界を象徴する蓮華、荷葉、祥瑞をあらわす鳳凰や龍、また唐草文や菊折枝の有職模様などがあり、精緻な刺繍や描絵によって表現されます。

さて、浄土真宗の荘厳については、本願寺第八代・蓮如上人（応永二十二〈1415〉年～明応八〈1499〉年）の山科本願寺において、今日にも通ずる原型が整えられます。京都山科の地は、蓮如上人の念願であった本願寺再興の地であり、文明十二（1480）年に御影堂が落成すると、漸次、阿弥陀堂や大門等の諸堂舎が建立されました。蓮如上人十男の願得寺実悟の『山科御坊事并其時代事』によれば、御影堂内は、現在と同様に三間四面の上壇に造られており、中央には親鸞聖人の御真影が安置されていました。そして、左（北）の押板には、蓮如上人の御影が、右（南）の押板には、歴代上人の御影が掛けられて、そこには卓に三具足と灯台が置かれていたことがわかります。また、蓮如上人昵近の門弟である法専坊空善の『第八祖御物語空善聞書』には、延徳元（1489）年の報恩講御満座に「御念仏御坊様、御荘厳ハ五具足、真ニハアヒオヒノ松、菊ミヤマシキヒ、下草ハ水仙花。イツレモ上様（蓮如）ノ御タテ候」と、内陣中央の親鸞聖人の御真影の前は五具足で荘厳され、蓮如上人手ずから仏花を立てたとあります。

そののち、本願寺第九代・実如上人（長禄二〈1458〉年～大永五〈1525〉年）の時期には、本願寺教団を安定的に維持していくために、組織や教義をはじめ、儀式や作法に関わる諸制度が整備されていくことになります。とくに儀礼については、山科本願寺末期の年中行事を記録した『永正十七年元旦ヨリ儀式』から、本願寺両堂の荘厳の様相をうかが

い知ることができます。打敷についてみますと、正月の儀式には「［朔日ヨリ］ウチシキハ唐ニシキ、ミツヒキハソライロノモンシヤ（紋紗）」、彼岸会には「ウチシキハキリカラクサ、ミツヒキハ蓮花のアサキ」、盂蘭盆会は「御影前ニハ蓮花ノ葉ミツヒキ、ウチシキハカ子（ね）ノマシリタル歟」など、年中行事によって様々な色や文様の打敷・水引が用いられていたことがわかります。また、蓮如上人の二十五回忌の時には、

御影前ハモエキノトムキム、ミツヒキハアサキノクモノソライロ也、三具足也、ケソクハ彼岸ノ如シ［霜月の如ク八角也五色ナリ］、カウタテ（紙立）アカシ（中略）前住様（蓮如）ノ御前ハケソク八角ニカウタテアカク五色ノモリ〇［ナリハ霜月ノ御影前ノ如ク］物也、ウチシキハ地アサキノキンラン也

と、御影堂の御真影の前は、打敷と水引が敷き掛けられた前卓あり、その上には三具足が置かれており、赤色の紙立（方立）をつけた八角の供笥には華束が盛られていました。一方、蓮如上人の前には、打敷を掛けた前卓に、おそらく三具足が置かれて、同様の華束が供えられていたようです。さらに、報恩講などの重要な法会では、

ウチシキハ毎年御定リ候キンラン、水ヒキハチヤノモンシヤ、五カサリノ香炉ヲ［香ハンノ］ウヘニアケヲキ、アホ香炉ヲシタニヲキ候、サテ廿二日御日中ヨリアホ香ロヲ香ハンヘアケ、コトウヲシタニサケ候

と、打敷は毎年金襴のものと定まっており、水引は茶色の紋紗で、前卓の上には五具足が置かれていたことがわかります。なお、二十一日の逮夜には、前卓の正面奥に香盤を据えて金香炉、その手前の香盤下に青香炉（土香炉）が置かれますが、翌日の日中からは、焼香のために香盤の金香炉と青香炉を入れ替えている様子がうかがわれます。その他にも、「面ノアントン（行灯）ハ六角ヲツル也」とみえる六角の金灯籠や灯台（菊灯）など、その後に継承された仏具を確認することができます。

こうした永正末年を画期とする本願寺の荘厳整備の背景には、当時流行していた書院の座敷飾りの様式を導入したことが指摘されております。先掲の『山科御坊事并其時代事』には、次のような記述がみられます。

御堂の卓、野村殿にてハ、打置をハ押板の上にハをかぬ物と申候、と相阿弥申入たるに〈能阿弥カ孫芸阿弥カ子真相ト号ス〉よりて、御堂にをかれたる打置をハ悉とらせられ、卓ニさゝせられたる事候

山科本願寺御堂の内陣の押板には、従来、「打置」が置かれていましたが、相阿弥の申し入れによって、すべて「卓」に替えられたとあります。興味深いのは、足利義政に仕えた同朋衆で、唐物奉行を務めた真相（相阿弥）の助言を得ていることです。彼は真能（能阿弥）の孫、真芸（芸阿弥）の子で、いわゆる三阿弥の一人です。祖父や父と同様に、室町将軍家の書画や唐物の鑑定をはじめ、座敷飾り・連歌・作庭など多方面に才能を発揮した人物です。山科本願寺では、蓮如上人によって書院造の様式が取り入れられ、内陣に

は座敷飾りとして発達した押板が設置されるようになり、次代の実如上人期には、卓をはじめ、打敷や水引、金灯籠・菊灯など、堂内を荘厳する仏具が採用されるようになりました。

このように本願寺の荘厳は、戦国期を通じて整備されていき、広く教団内へも展開していくことになります。そして、永禄二（1559）年に本願寺が勅許を得て「門跡」寺院になると、同四（1561）年の宗祖親鸞聖人三百回忌を契機に、さらなる変様をみることになります。加賀光教寺の顕誓が見聞した記録『今古独語』には、

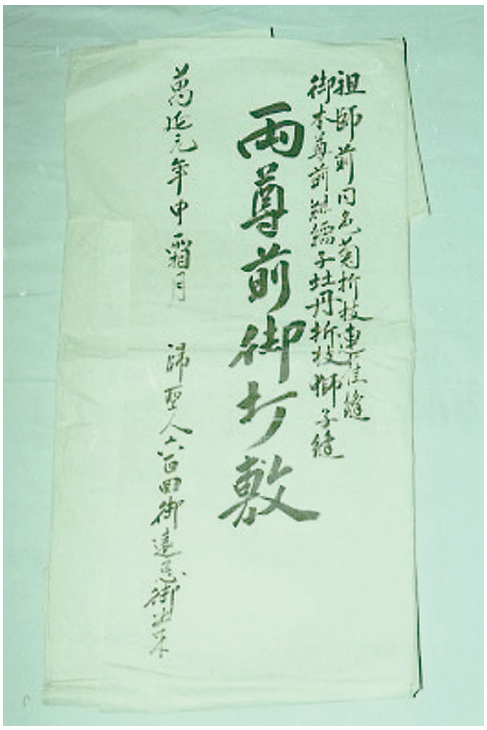
> 次ニ堂荘厳ノ様、マツ御厨子ノ内ヲ金ニナサレ、外ノ彫モノ綵色ナヲサレ、釣灯台モ金ニ拵ヘラル、前ノ机大ニナサレテ、ソレニ随ヒ打敷水引用意アリ、華束ハ十合、仏壇ニマイル、香立モ、金ニ金地テ上ニ著色ニ唐華ヲ書セラル、モロカザリハ例年ノ如ク、二ノ間押板ニハ、伝絵四幅ノ前ニ三具足ヲ卓ノ上ニ置ル、両ノ脇ニハ、大ナル卓ニ経ヲスヘ置レ、日中ノ前ニ面ヘ出サル

とあり、御真影を安置する厨子の内側は金箔で飾られ、外側の彫り物にも彩色がほどこされたことがわかります。また、金属製の釣灯台を新たに拵え、前卓も大きなものに取り替えられて、それに合わせて打敷と水引も新調されたとあります。なお、釣灯台は今日の輪灯をさすと思われ、従来は京都市下京区の因幡薬師（平等寺）のものを、江戸期に西本願寺が模倣し、それを東本願寺が真似て使い始めたとされてきました。ところが近年、この釣灯台（輪灯）については、門跡成した本願寺の荘厳整備の一環として工夫されたものと指摘されています。

さて、文禄元（1592）年、本願寺第十一代・顕如上人（天文十二〈1543〉年～文禄元〈1592〉年）が没すると、その跡を長男教如上人（永禄元〈1558〉年～慶長十九〈1614〉年）が継職します。ところが、周知の通り、翌年に豊臣秀吉は、教如上人を退けて弟の准如上人を宗主としました。退隠の身にあった教如上人は、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康によって、慶長七（1602）年、京都東六条に寺地を与えられ、寺基を定めることになります。次いで家康から、上野国厩橋妙安寺に安置されていた親鸞聖人木像が寄進されると、慶長八年に阿弥陀堂、翌九年には御影堂を建立し遷仏、遷座がなされます。こうして東本願寺は、一派の本山としての格式を整えることになりました。そして、万治四（1661）年の親鸞聖人四百回忌を迎えるにあって、両堂の改築が進められることになり、明暦四（1658）年に御影堂が、少し遅れて寛文十（1670）年には阿弥陀堂が竣工し、「都富士」と評される壮麗な大伽藍となりました。ところが、そののち、天明八（1788）年、文政六（1823）年、安政五（1858）年、元治元（1864）年の四度に及んで罹災焼失し、そのたびに再建がおこなわれました。現在の東本願寺は、明治二十八（1895）年の建築となります。

こうした焼失と再建の歴史のなかにあっても、東本願寺両堂の荘厳は、その都度、新たに装いを整えていきました。そこには、我々と阿弥陀仏の浄土を取り結ぶ他力の信心があ

り、その信心こそが阿弥陀の浄土を具現化するわけです。それが荘厳であり、阿弥陀仏の本願の働きにほかなりません。現在、東本願寺に保管されている打敷のなかに、文久元（1861）年の宗祖親鸞聖人六百回忌に新調・奉納された打敷があります。打敷の包紙には「祖師前、日色菊折枝連雀縫／御本尊前、紺繻子牡丹折枝獅子縫／両尊前打敷／萬延元年申霜月　祖師聖人六百回忌御遠忌御出来」とあり、紺色の繻子に祖師前は菊に連雀、本尊前は牡丹に獅子が刺繍されたものであることがわかります。こうした打敷は、人びとの信心が具体的な形となって現されたものであり、その真実心が絢爛豪華な織物となって、阿弥陀仏の浄土である堂内を荘厳するのであります。



打敷の包紙（上）

文久元（1861）年新調・奉納された打敷（下）

参考文献

草野顕之・西田真因・仁科和志『真宗大谷派の荘厳全書』（四季社、1994年）

草野顕之『戦国期本願寺教団史の研究』（法藏館、2004年）